

『伊勢物語』における貴種流離譚的構造について

——「東下り」章段群および「芥川」章段をめぐって——

伊 勢 英 明

An Essay on the Structure of "Ise-Monogatari" as a kisyuryuritan
(Wandering Noble Man's Story)

— Concerning "Azumakudari" chapters and "Akutagawa" chapter —

ISE Hideaki

要 旨

『伊勢物語』のいわゆる「東下り」を貴種流離譚であるとする指摘は折口信夫以来諸先学によって繰り返しなされているが、貴種流離譚を字義通り捉えただけの指摘であるゆえにあまり説得力のあるものとはなっていないと思われる。本稿は、既発表の拙稿で論述した貴種流離譚についての私見を踏まえ、『伊勢物語』の「東下り」章段群における貴種流離譚的構造を明らかにするものである。

また「東下り」章段群に先立つ「芥川」章段は、流離する貴種につきものである「罪」を描き、流離のきっかけを示すことにより以下の「東下り」につながっていくという捉え方が従来なされているが、本稿では「芥川」章段が構造的にいかにして「東下り」章段群を導き出しているのかを明らかにする。即ち、「芥川」章段は倒立した貴種流離譚であり、その揺り戻しとして「東下り」章段群の貴種流離譚があったのである。

一

『伊勢物語』のいわゆる「東下り」を貴種流離譚であるとする指摘は折口信夫以来諸先学によって繰り返しなされ、それ自体全く目新しさのない、手垢にまみれたとすら言ってもよいこととなっている。しかしそうした場合に、では貴種流離譚とは何かと言えば、「貴い血筋の者（貴種）」が本来住むべき場所（こ

の世、都）を離れ遠い異郷（あの世、辺境）へと流離する物語（譚）」というように字義通り捉えられていただけだったのではなからうか。

確かに、折口が「貴種流離譚」という（それ以降の物語文芸論にとって重要な）タームを用い出した時折口自身「まれびと」や「ほかびと」、「水の女」などをめぐる日本の古代信仰についての包括的な理論が背景にあったのだとしても）はしっかりと定義していたとは言えず、「罪を犯した」貴い血筋の者（貴種）が本来住むべき場所（この世、都）を離れ遠い異郷（あの世、辺境）へと流離する物語（譚）」という程度以上に考えていたようには思われないのである。しかし、（罪を犯したり貴い血筋であったりするかどうかはさておき）主人公が旅に出る物語（や小説）はそれこそ古今東西ごまんとあり、また『奥の細道』の有名な冒頭を引くまでもなく人生が旅であり、文芸が人生を描くものであるとすれば文芸はすべからず貴種流離譚であると言ふことすらでき、ことさら貴種流離譚を論じる意味がなくなってしまうのではなからうか。

そこで私は、これまで発表した数編の論稿を通じ、貴種流離譚についておおよそ以下のようなことを述べた。

まず成立については、三谷栄一氏の「あらゆる人間の自己表現は若干機能的な理解ではあるが、類型性をもっており、散文においても、それはのがけられない宿命なのである。（中略）／＼ところで、貴種流離譚は、既に明らかにされ

ている如く、穀物の豊穡を祈る儀礼や成年・成女式の儀礼を媒介に生まれた話型である。(中略)／さて、貴種流離譚の発生の契機の媒介となった穀物の豊饒を祈る儀礼や成年・成女式の儀礼は、死と再生という形式によって支えられている⁽¹⁾という論述に従いながらも、私としては貴種流離譚の主人公が「火責め」ないしは「煙責め」(さらにその派生形として「雷責め」あるいは「虫責め」)に遭うことが多いことから、氏の言う「穀物の豊穡を祈る儀礼」即ち農耕儀礼の農耕は焼畑農耕ではないかという仮説を持っている。

そしてこうした成立論的観点から見た時、(本来予祝儀礼であつたはずの)貴種流離譚に当初から悲劇的要素があつたと見ることはできないし、また流離する貴種に必須とされる「犯し」や「罪」についても、河添房江氏が言うように「貴種流離譚をその始源へと溯るとき、「罪」の構造はかならずしも必須となつて視えてはこない。罪は、貴種流離がいかにもそれにふさわしい理由づけを要するようになって後に分泌され定着した、とみる方が自然であろう。つまり罪の生成の構図は、貴種流離譚そのものではなく、その解釈の問題にむしろ属している⁽²⁾」と考えられるのであり、流離する貴種は何らかの欠損を抱えているくらいにもう少し広く考えておきたいと思うのである。

次に貴種流離譚の具体的なモデルとしては島内景二氏の「貴種流離譚は、実は、女性の援助を眼目とするものである。すばらしい素質をもった貴い人物が苦しみを抱いて辺境の地をさすらうことになる。そして、水のもつ浄化能力を体現する女性(「水の女」という)と結ばれ、罪を清められ、都に戻って繁栄できるようになる。スセリビメのように男性(大国主)と結婚できる場合もあるが、源義経を愛した女性たちのように犠牲になってしまう場合もあるのだ。男性を救った女性は、その男性の罪をもらいうけて不幸になってしまふこともあるわけである。「女性の犠牲的精神」が、傷ついた英雄の苦悩を取り除く。(中略)／旅に出た貴種には危険がつきまとう。(中略)／「貴種流離譚」の一つの結末は、男性の宝物の獲得である。これは、何でも所有者に願いをかなえさせる素晴らしい宝物であり、「如意宝」と私は命名して重視している。如意宝は、その人物の完成した人格を象徴する。つまり、「貴種流離譚」という話型は、男性が「真実の自分自身」を発見し獲得するためには、「触媒」として彼を愛し場合によっては危険をおかす覚悟のある女性が必須であることを物語っ

ているのである」という「拡大解釈⁽³⁾」に概ねよりつつ、以下の三点を補足しておきたいと思う。

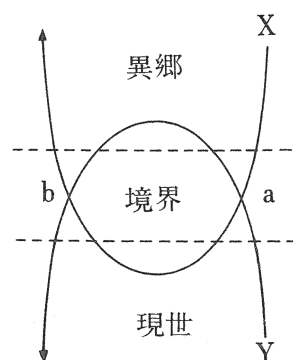
即ち一つ目は、貴種は流離する際に「うつぼ舟」と呼ばれるカプセル状のものに乗る(それが同時に「忌み籠り」となる)ことが多いということ。二つ目は、「旅に出た貴種に」「つきまとう」「危険」には「火責め」や「煙責め」が多いということ。三つ目は、「水の女」は、(Ⅰ)(入水するなどして)自己を犠牲にする、(Ⅱ)主人公(貴種)と結婚する、(Ⅲ)(如意宝を授けるなどして)主人公を救済・援助するというプラスの役割と(Ⅳ)主人公に試練を与えるというマイナスの役割を持つという両義的性格があり、これは「水の女」が神話学で言う大地母神やユングの分析心理学で言う太母(グレートマザー)に通底する存在であるからと考えられるということである。

以上述べたことに基づき、貴種流離譚を時間軸に添ってモチーフを並べて表にまとめると次のようになる(参考のために、具体例として以前別稿⁽⁴⁾で貴種流離譚であると指摘した芥川龍之介の「蜜柑」の話を下段に対応させながら記しておくことにする)。

貴種流離譚のモチーフ	「蜜柑」の話素
A 貴種	a 「私」
B 欠損	b 生命力の欠如
C 「うつぼ舟」	c 二等客車
D 忌み籠り	d cへの乗車
E 辺境(水辺)への流離	e 横須賀への流離
F 「水の女」	f 小娘(役割Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ)
G 試練(煙責め)	g 隧道内での煤煙
H 如意宝	h 蜜柑(fからaへ)
I 都への帰還	i 都への帰還
J 再生・繁栄	j 生命力の回復

また、貴種流離譚を図で表せば次のようになるが、実はこの図は、高橋亨氏がしばしば用いられており、氏はこれで「すべての話型を」「原理的に説明することができるとされる⁽⁵⁾。しかし、私見によればこの図はむしろ貴種流離譚を図示化したものというのに相応しいと思われるのであり、その場合図の

「Y」が流離する貴種に当たり、「X」が「水の女」に当たる。また、「a」で「火責め」や「煙責め」などの試練が行われ、「b」で「如意宝」の授受が行われる訳である。



叙上の論拠並びにその他の論点は既発表の論稿に譲り、節を改めて『伊勢物語』の「東下り」章段群を見て行くことにしよう。

二

以下の論述の前提としてまず確認しておきたいのだけでも、『伊勢物語』において「東下り」という場合狭義では（通行本である定家本系統の）第九段のみを指す（その場合には単一の章段であるから当然章段群とはならない）が、本稿において「東下り」という場合は、第七段から第一五段までを一括し（分節化し）て「東下り」（従って章段群となる）と呼ぶことにする。

当該章段群の本文を掲げておこう⁽⁶⁾。

むかし、男ありけり。京にありわびて東にいきけるに、伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに、浪のいとしろくたつを見て、
いとどしく過ぎゆくかたの恋ひしきに
うらやましくもかへる浪かな
となむよめりける。

（第七段）

むかし、男ありけり。京や住み憂かりけむ、東のかたにゆきて住みどころ求むとて、友とする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃の国、浅間の嶽に、けぶりの立つを見て、

信濃なる浅間の嶽に立つけぶり

をちこち人の見やはとがめぬ

（第八段）

むかし、男ありけり。その男、身を要なきものに思ひなして、京にはあらじ、東のかたに住むべき国求めに、とてゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくてまどひいきけり。三河の国、八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河のくもでなれば、橋を八つわたせるによりてなむ、八橋といひける。その沢のほとりの木のかげに下り居て、かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたといとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句のかみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣きつ、なれにしつましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひの上に涙落してほとびにけり。

ゆきゆきて駿河の国にいたりぬ。宇津の山にいたりて、わが入らむとする道はいと暗う細きに、つたかへでは茂り、もの心ぼそく、すずろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり。「かかる道はいかにかいまする」といふを見れば、見し人なりけり。京に、その人の御もとにとて、ふみ書きてつく。

駿河なる宇津の山辺のうつつにも

夢にも人に逢はぬなりけり

富士の山を見れば、五月のつごもりに、雪いとしろう降り。

時しらぬ山は富士の嶺いつとてか

鹿の子まだらに雪の降るらむ

その山は、ここにたとへば、比叡の山を二十ばかり重ねあげたらむほどして、なりはしほじりのやうになむありける。

なほゆきゆきて、武蔵の国と下総の国との中に、いとおほきなる河あり。それを角田河といふ。その河のほとりにむれゐて、「思ひやれば、かぎりなく、遠くもきにけるかな」と、わびあへるに、渡守、「はや舟に乗れ。目も暮れぬ」といふに、乗りて渡らむとするに、みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも、しろき鳥の嘴と脚とあかき、鳴のおほきさなる、水のうへに遊びつつ魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見知らず。渡守に問ひければ、「これなむ都鳥」といふを聞きて、名にしおはばいざこと問はむ都鳥

わが思ふ人は在りやなしやと

とよめりければ、舟こぞりて泣きにけり。

(第九段)

むかし、男、武蔵の国までまどひありきけり。さてその国にある女をよばひけり。父はこと人にあはせむといひけるを、母なむあてなる人に心つけたりける。父はなほびとにて、母なむ藤原なりける。さてなむあてなる人にと思ひける。このむこがねによみておこせたりける。住むところなむ入間の郡みよしのの里なりける。

みよしののたのむの雁もひたぶるに

君がかたにぞよると鳴くなる

むこがね返し、

わがかたによると鳴くなるみよしのの

たのむの雁をいつか忘れむ

となむ。人の国にても、なほかかることなむやまざりける。

(第一〇段)

むかし、男、東へゆきけるに、友だちどもに道よりいひおこせける。
忘るなよほどは雲るになりぬとも
空ゆく月のめぐりあふまで

(第一段)

むかし、男ありけり。人のむすめを盗みて、武蔵野へ率てゆくほどに、盗人なりければ、国の守にからめられにけり。女をば草むらのなかに置き、逃げにけり。道くる人、「この野は盗人あなり」とて火つけむとす。女わびて、

武蔵野は今日はな焼きそ若草の

つまもこもれり我もこもれり

とよみけるを、聞きて、女をばとりて、ともに率ていにけり。

(第二段)

むかし、武蔵なる男、京なる女のもとに、「聞ゆればはづかし、聞えねば苦し」と書きて、上書に「武蔵鎧」と書きて、おこせてのち、音もせずなりにければ、京より女、

武蔵鎧さすがにかけたのむには

問はぬもつらし問ふもうるさし

とあるを見てなむ、堪へがたき心地しける。

問へばいふ問はねばうらむ武蔵鎧

かかる折にや人は死ぬらむ

(第三段)

むかし、男、みちの国にすずろに行きいたりにけり。そこなる女、京の人はめづらかにやおぼえけむ、切に思へる心なむありける。さてかの女、なかなか恋に死なずは桑子にぞなるべかりける玉の緒ばかり
歌さへぞひなびたりける。さすがにあはれと思ひけむ、いきてねにけり。
夜ふかくいでにければ、女、

夜も明けばきつにはめなでくたかけの

まだきに鳴きてせなをやりつる

といへるに、男、「京へなむまかる」とて、

栗原のあねはの松の人ならば

都のつとにいざといはましを

といへりければ、よろこぼひて、「おもひけらし」とぞいひをりける。

(第一四段)

むかし、みちの国にて、なでふ事なき人の妻に通ひけるに、あやしう、
さやうにてあるべき女ともあらず見えければ、

しのぶ山しのびて通ふ道もがな

人の心のおくも見るべく

女かぎりなくめでたしと思へど、さるさがなきえびすごころを見ては、い
かがはせむは。

(第一五段)

以後本稿においては、右の第七段、第一五段までの「東下り」章段群をまず
大きく二つに分け(分節化し)、第七段、第八段を「予告編」、第九段以下を
「本編」とし、その上でさらに第九段以下の「本編」を第一三段までの「東国
編」と第一四段、第一五段の「陸奥編」に分割(分節化)して考察を加えるこ
とにする。

ところで、その前に多少寄り道になるが、小林正明氏は第七段から第九段に
ついて次のように言及している。

貴種流離譚の典型をなす。犯しを起源にして貴種が、天から地・京から
鄙・上から下・聖から俗・内部から外部へと、二項的な対立群の劣位項へ
流離するという貴種流離譚は、山口昌男のより力動的かつシステマ的な
「中心と周縁」論や王権論にくみこまれてきたかの感がある。だが、平安
文学での王権論の現在がともすれば中心性の賛美にすりよっていく情況が
あるだけに、流離という排除や疎外の負性を鮮明に刻印した貴種流離譚と
いう用語はかえって批判性を發揮するのではないであろうか⁽⁷⁾。

小林氏は「東下り」章段群(本稿で言う「予告編」と狭義の「東下り」)を
「貴種流離譚の典型をなす」とし、貴種流離譚を貴種が「天から地・京から鄙・
上から下・聖から俗・内部から外部へと、二項的な対立群の劣位項へ流離する」
物語と捉えているが、ここで氏が「天から地」「上から下」と言っているのは
『竹取物語』のかぐや姫を念頭に置いてのことだろう。しかしかぐや姫が流離

する貴種ではなく「水の女」であるということは、既に別稿で指摘した⁽⁸⁾。ま
た貴種流離譚は異郷訪問譚でもあるのだが、異郷はこの世に富や幸福をもたら
す場所でもあるのであって、必ずしも氏の言うような「二項的な対立群の劣位
項」とは言いえない。

さて本題に戻り「予告編」から見て行くことにするが、第七段から第八段、
第九段と読み進めて行った時誰しもが違和感を覚えるのは、第八段が東下りの
ルートから大きく外れていることではなからうか。「男」は今の東海道を海沿
いに下って行ったと思われるのに、「信濃なる浅間の嶽」の煙が詠まれている
からである。

ここに後の増補を見る見方もあろうが、それを採らないとすれば他にどのよ
うな考え方ができるか。私はここでは、明らかな地理的矛盾を犯してまでも煙
を点描することが大事だったと考える。即ち、貴種流離譚において煙(責め)
は(火や雷と同様)貴種が受ける試練として重要なモチーフの一つであり、
ここで敢えて煙を点描することにより以下の物語が貴種流離譚であることを予
告しようとしたのではなかったらうかと考えるのである。

だとすれば、第七段も貴種流離譚の重要なモチーフである「水の女」を直
接的にではなく暗示的にではあるが、描いたものと考えられるのではないか。
というのは、これも別稿で指摘した⁽⁹⁾ように「水の女」はしばしば(入水する
という形で)出自である水界に戻って行くが、「かへる(返る)帰る」浪」を
見送るここでの男の姿は、豊玉比売を見送る山幸彦や弟橘比売を見送る倭建命、
かぐや姫を見送る翁や帝など、水界に帰る「水の女」を呆然と見送る流離する
貴種の姿を彷彿させるからであり、貴種流離譚のクライマックスに出てくる重
要なモチーフをそれぞれに点描することによって第七段第八段の両段相まっ
て第九段以下が貴種流離譚であることを予告していると考えられる。

次いで「本編」を「東国編」から見ていくことにするが、「東国編」におい
てまず注目しておきたいのは、第一〇段の「藤原なりける」母である。これに
ついて諸注あまり触れることはないのだが、「藤原」(の女)に関して小林茂美
氏は次のように指摘している。

古代帝室の皇紀はすべて「水の女」の家柄から冊立された。その典型氏
族が藤原氏。かつて允恭天皇の徴により、皇后忍坂大中姫命の妹藤原之

琴節郎女（衣通郎姫）を、近江の坂田から養い立てて大和入りの中臣烏賊津臣（允恭記）。（中略）また、のちに藤原を名告る中臣鎌足に養育されたのが、天智天皇の皇子の車持不比等で、これは淡海公と諡されていた。その娘の安宿媛を聖武天皇の後（光明皇后）に立てて以来、藤原氏の外戚権襲断は決定的なものとなった。要するに、淡海（近江）と大和の藤井が原いらいの水霊信仰が背景にあったからである。宮廷の重要神事に奉仕した中臣女・藤原女の由来も、そこから説かれるべきであった¹⁰⁰。

第一〇段に「藤原なりける」母が登場するのは、没落した多くの藤原氏が東国に定住していたという当時の歴史的事実の反映と言えようが、ここで「藤原なりける」ことをことさらに言挙げしているのは、彼女が貴種流離譚の主要な登場人物の「水の女」であることを示すためではなかったろうか。

では「水の女」としての彼女の役割とは一体何かと言うと、歌の中で「たのむの雁」と詠まれている娘を授けるという役割だったと考えられるのであり、そしてさらには、この娘が如意宝に当たると考えられる（即ち前に挙げた「水の女」の役割（Ⅲ）ということになる）。厳密に言えば、第一〇段で「たのむの雁」と詠まれる娘と第二段の「人のむすめ」（仮に「武蔵野の女」と呼ぶ）を同一人物とする本文上の明確な根拠はないのだが、「東国編」として分節化する立場から敢えて同一人物とする（即ち結婚を認めない「なほびと」の父のもとから「藤原なりける」母の手引きで「むすめを盗み」出したと見る）ならば、この娘の機転により「男」は火責めの危機から脱するのであり、この娘は、大國主が試練を乗り越える際に用いた、須勢理毘売が授けた「ひれ」や、倭建命が火責めを脱する際に用いた、倭比売から授かった「御囊」に入っていた「火打」と同様貴種の危機を救う如意宝の機能を發揮しているのである。

一方、水を湛えた「たのむ」たのも（田の面）に降り立つ「雁」（という異郷から渡ってくる鳥）とされるこの「武蔵野の女」も、（如意宝であると同時に）「水の女」と見なされるのであり、役割としては（Ⅰ）の自己を犠牲にする（Ⅱ）の貴種と結婚する（女は男を「つま」夫と呼んでいる）ということになる。また第一三段の「京なる女」も「水の女」と考えられ、「武蔵野」は如意宝だったのではなからうか。だがそれは授からず、男は「かかかる折にや人は死ぬらむ」と仮死（瀕死）状態に陥る、と第一三段を読み解くことができ

よう。さらに「水の女」の役割に関連して言えば、（Ⅳ）の試練を与えるは「道くる人」（必ずしも女ではないが）がそれを果たしているのである。叙上により貴種流離譚と「東国編」との対応をまとめると次のようになる。

貴種流離譚のモチーフ		「東国編」の要素
A 貴種	a 男（在原業平）	
B 欠損（罪）	b 女（高子）の掠奪・喪失	
C 「うつぽ舟」	c 舟	
D 忌み籠り	d 武蔵野での「こもり」	
E 辺境（水辺）への流離	e 東国（八橋・「角田河」）への流離	
F 「水の女」	f 1 武蔵野の女の母（役割Ⅲ） 2 武蔵野の女（役割Ⅰ・Ⅱ） 3 「道くる人」（役割Ⅳ） 4 「京なる女」（役割Ⅲ）	
G 試練（火責め）	g 武蔵野での火責め	
H 如意宝	h 1 f 2と同じ（f 1から男へ↓喪失） 2 「武蔵野」（f 2から男へ↓授からず）	
I 都への帰還	i 陸奥へのさらなる流離	
J 再生・繁栄	j ナシ↓仮死（瀕死）状態	

この表に補足すると、Aの「貴種」について「男」が主人公であるということだけでなく既に貴種としてよいというのが私の立場だが、「男」が実在の在原業平だとすれば、桓武天皇を曾祖父とするまさに貴種と言える。また先述のように、Bの「欠損」について必ずしも罪である必要はないが、この場合には後に取り上げる「芥川」章段に描かれる「女（高子）の掠奪」が「罪」になる。またCの「うつぽ舟」は、「角田河」を渡る際に乗った「舟」にその一端がわずかに窺えるに過ぎず、従ってDの「忌み籠り」もそれに乗船することで果たされるのではなく、ここでは武蔵野での「こもり」によってなされる。しかしそこで同時に行われたGの「試練（火責め）」と同様十分なものとは言えず、それが「武蔵野の女」という如意宝を失い、「京なる女」から如意宝を授かり損ね、ついには「仮死（瀕死）状態」に陥り、「陸奥へのさらなる流離」を招

来するのである（盗み出した女を失うことによりさらなる流離へと向かうことになるという形は、関根氏も指摘する¹⁰⁾ように「芥川」章段と同一である）。

次に「陸奥編」を見ることにしよう。ここにも、「水の女」らしき存在が二人登場する。そのうち第一四段の女（「みちの国の女」）は、男へ贈った歌の中で「桑子にぞなるべかりける」と詠んでいるのだが、これは桑子、即ち蚕の繭への籠りおよび流離する貴種が受けるべき試練としての「虫責め」の両方を示唆するものだったと考えられるのではなからうか。

管見によれば、貴種流離譚の中で貴種が虫責めに遭うケースが他に三例ある¹¹⁾。即ち、『古事記』の大国主の蜂と「呉公」、『源氏物語』の玉蔓の蜚、夏目漱石の『坊っちゃん』のバッタがそれであるが、それらに共通するのはいずれも「忌み籠り」の最中に虫責めに遭うことであり（ただし前二者が忌み籠りを継続するのには後者は中断してしまう）、ここでの男も忌み籠りと同時に虫責めに遭遇する可能性があったのではなからうか。

ところが、男は一旦は女の誘いに乗り女の家を訪れながら深更の「まだきに」帰ってしまい（即ち忌み籠りを中断してしまい）、その結果『坊っちゃん』の主人公である「おれ」と同様、如意宝を授かることはできなかったのである（女の詠んだ歌の中の「玉の緒」の玉が如意宝（珠）であったかもしれないに）。そしてこのようにして自らチャンス逃した主人公に対して、第一五段に出てくるもう一人の女（「なでふ事なき人の妻」）は、「水の女」としての片鱗すら最早示して見せることはなかったのであり、この点について河添房江氏が「一〇〽一五段は、男の東下りと一連の章段であり、話型としては、貴種流離譚（中略）の一環をなすのであろう。しかしながら、鄙の女と交わることで、その呪力を身につけ都に帰還をとげるといった再生の構図は、希薄か、あるにしても默契として深層にしずめられた感がある¹²⁾」と述べていることは十分肯綮に当たっていると言いうことができよう（ただ帰京直後に当たる第一六段において、男が友人である「紀の有常」に対し「天（＝尼）の羽衣」を贈るほどの人格に成長を遂げていることは、「東下り」の流離が決して無駄なものだったのではなかったことを示唆しているようにも受け取れるが、だからと言って帰京後の男が「繁栄」したとはとても言えそうもない状況にあることは間違いないからう）。

以上をまとめると、貴種流離譚と「陸奥編」との対応関係は次のようになる。

貴種流離譚のモチーフ		「陸奥編」の話素
A 貴種	a	男（在原業平）
B 欠損（罪）	b	1 「武蔵野の女」の喪失 2 仮死（瀕死）状態
C 「うつぼ舟」	c	「みちの国の女」の家 （「桑子」（＝蚕）の繭）
D 忌み籠り	d	c への訪問（籠り） ↓ 中断
E 辺境（水辺）への流離	e	陸奥への流離
F 「水の女」	f	「みちの国の女」および「人の妻」（役割Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ ↓ いずれも果たせず）
G 試練（虫責め）	g	「桑子」責め
H 如意宝（珠）	h	「玉（の緒）」 ↓ 授からず
I 都への帰還	i	都への帰還
J 再生・繁栄	j	ナシ

叙上のように、『伊勢物語』第七段から第一五段までの「東下り」章段群は基本的に貴種流離譚の要素を全て備えているのでありまさに貴種流離譚と言ってよいのだが、十分な「忌み籠り」（とそれに連動する「火責め」や「虫責め」という試練）が果たされなかったために如意宝を授かることができず（あるいは一旦授かったものの間もなく失ってしまい）、結果流離する貴種である男は帰京後さしたる「再生・繁栄」もできなかったのである（その意味で、「東下り」は以前別稿で述べた倭建命の東征譚や『坊っちゃん』の「四国辺流離譚」と同様「反貴種流離譚」とするべきだろう¹³⁾）。

では次に、「東下り」章段群に先立つ「芥川」章段について考えてみよう。

三

まず本文を掲げる。

むかし、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうじて盗みいでて、いと暗きにきけり。芥川といふ川を率ていきければ、草のうへに置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。ゆくさきおほく、夜もふけにければ、鬼あるところとも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥におし入れて、男、弓、胡籙を負ひて、戸口にをり。はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。あなやといひけれど、神鳴るさわぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率てこし女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひしとき

露とこたへて消えなましものを

これは、二篠の後の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひていでたりけるを、御兄堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとり返し給うてけり。それをかく鬼とはいふなりけり。まだいと若うて後のただにおはしける時とや。

(第八段)

この章段については、業平と目される男が高子と(種明かし)される「え得まじかりける」女を「からうじて盗み」出すという罪を犯すことが描かれ、それが流離の動因となり以下の「東下り」章段群につながっていくという理解が従来なされてきた。例えば、長谷川政春氏は次のように述べている。

かつて折口信夫は、日本の口承文芸の中に、「物語要素」として「貴種流離譚」を発見したが、この東下りもまたその一例として捉えられていた。

この世に生を受けた貴い人が罪を犯したゆえに、苦しい漂泊を余儀なくされる話は、あたかも『伊勢物語』の章段の配列(初冠本)が一代記風の有機的主題的に統一されていることから考えて、東下り章段群の直前に二条后になる前の「ただ人」であった藤原高子との恋愛譚の章段群が配され、「昔男」の都に「ありわび」「住み憂かり」「京にはあらじ」と決心して漂

白の旅へ出てゆく話の構成にうかがえる¹⁰⁾。

ここでこのこと自体に異を唱える気は私にも全くないが、補足的に以下のようなことを述べておくことにしたいと思う。

そこで最初に指摘したいのは、この章段に貴種流離譚の主要なモチーフが見られるということである。

まず主人公の「男」がおり、この男は「芥川」という川のはとり(水辺)へ流離していくのである。そしてこの男は雷という試練にも遭う(ちなみに、これで「芥川」から「東下り」にかけて貴種流離譚の試練である「煙責め」(第七段)・「火責め」(第二段)・「虫責め」(第一四段)・「雷責め」(第六段)という四つの主なものが全て出揃ったことになる)。

さらに「女」は、「水の女」だったと考えられるのではなからうか。この女は「鬼」に食われるという形で自己犠牲をしているし、(結婚する可能性も勿論)如意宝を授ける可能性もあったのではないかと思われるからである。

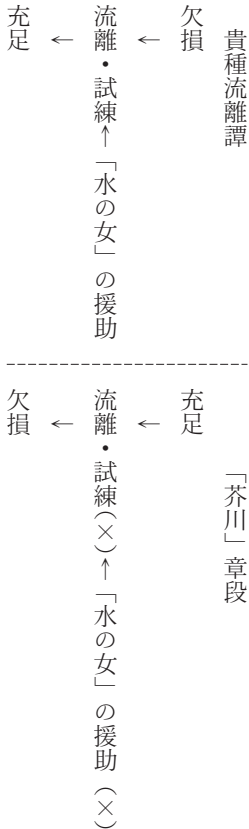
というのは、芥川へと運ばれて行く途上女は夜露を見て「かれは何ぞ」と男に問いかけるが、通常これは将来の後候補である女が、箱入り娘として露を見たこともないほど大切に育てられていたことを示すと解釈されている。しかしながら、いくら箱入り娘だからと言って、露を見たことがないなどということはとても信じがたいのであって、これは女が男に対して謎かけという一種の難題を出した(須佐能男が大国主に、かぐや姫が五人の貴公子に課したのと同様に)ものと考えられる。そしてもし仮に男が「露」白玉と答えていたら、そこで「白玉」如意宝(珠)が授けられたのではなかったかと考えられるのである。さらにこの女自身(「武蔵野の女」と同様)如意宝であり、この女を得ることによって男の前途が開けるといふ可能性があったのではなかったらうか。また「うつぼ舟」らしきものは出て来ないが、忌み籠りの場としていかにも相応しい「あばらなる蔵」も出てくるのであり、このように見てくると貴種流離譚としてのモチーフ上の要件は十分満たされているように思われる。

しかしながら、右の「あばらなる蔵」での忌み籠りは女によって代行されているのであり、(中断どころか)男自身は全くしておらずそこの鬼の出現という試練も男には気づかれてさえいない(従って当然乗り越えられようもない)のであるし、同様にせっかく如意宝(珠)を授けるべく出された試練としての

謎かけも、男は先を急ぐあまり無視し、その結果如意宝（珠）を授かり損なってしまうのである。さらにもう一つの如意宝であった女も、（試練を乗り越え一人前の人格（魂Ⅱ玉）の完成の象徴として授けられたものではなく）強引に盗み取ったものだっただけにあっさり失ってしまう。また男の流離も、自分が「うつぼ舟」に乗って（忌み籠りしつつ）運ばれて行くのではなく、自らが女を（背負って）運んで行くという転倒したものとなっているのである。

そもそもこうした「芥川」章段と貴種流離譚との齟齬は、既に「芥川」章段の始発当初からあったと言えるのではなからうか。貴種流離譚は、欠損を抱えた貴種が流離と試練を経（「水の女」の援助を得）て充足に至る過程の物語とまとめることも可能なのだが、「芥川」章段の開始時において、男は「え得まじかりける」女を「からうじて盗みいでて」という充足した状態にしているのである。そしてそういう状態からの流離の結末は、逆に女を失うという欠損状態に至ってしまうのである。

即ちこれを、次のように表すことができるのであるが、これは倒立した貴種流離譚と呼ぶことができるだろう。



叙上述べた貴種流離譚と「芥川」章段との倒立した対応関係を表にすると、以下のようになとめられる。

貴種流離譚のモチーフ		「芥川」章段の話素
A 貴種	a	男（在原業平）
B 欠損（罪）	b	女（高子）の掠奪↓自力による充足
C 「うつぼ舟」	c	ナシ↓自分が運ぶ
D 忌み籠り	d	「あばらなる蔵」の奥に女を押し入れる↓自身はせず
E 辺境（水辺）への流離	e	「芥川」への流離
F 「水の女」	f	1 女（役割Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ、Ⅲは果せず） 2 鬼（役割Ⅳ）
G 試練（雷責め）	g	1 謎かけ↓無視Ⅱ乗り越えられず 2 雷 3 鬼の出現↓気付かずⅡ乗り越えられず
H 如意宝（珠）	h	1 f1に同じ（自力での捕獲↓喪失） 2 「白玉」（f1から男へ）↓授かれず
I 都への帰還	i	東国へのさらなる流離
J 再生・繁栄	j	ナシ↓女の喪失Ⅱ欠損

右の表に示したように、「芥川」章段での男は通過儀礼でもある貴種流離に失敗し、逆に欠損を抱えてしまう。そして、その欠損を解消すべく（その揺り戻しとして）東国へのさらなる流離へ向かうことになるのであり、それが「東下り」章段群という貴種流離譚だったのではなからうか。ただしそこでの貴種流離が必ずしも十全なものでなかったことは、本稿で論じた通りである。

註

- (1) 三谷栄一『物語文学の世界〈増補版〉〉(有精堂、昭和五三)、一二〇～一二三頁。
- (2) 河添房江「夜の寝覚めと話型——貴種流離の行方——」『日本文学』昭和六一・五。
- (3) 島内景二「ブームの解釈——ブーニン現象と『魔宮の伝説』——」(小松和彦編『これは「民俗学」ではない』所収、福武書店、平成元)。
- (4) 拙稿「芥川龍之介「蜜柑」試論——貴種流離譚の構造をめぐって——」(『仙台電波工業高等学校研究紀要』第二三号、平成五・一二)。
- (5) 高橋亨「話型」継子譚の構造——『落窪物語』(『國文學』平成元・九)など。
- (6) 本文の引用は、全て渡辺実校注『伊勢物語』(『日本古典集成』、新潮社、昭和五一)による。
- (7) 小林正明「東国に下る」(『別冊國文學竹取物語伊勢物語必携』「伊勢物語を読む」所収、昭和六三・五)。
- (8) 拙稿『竹取物語』試論——貴種流離譚の構造をめぐって——(『仙台電波工業高等学校研究紀要』第三〇号、平成一二・一二)。
- (9) (8)に同じ。
- (10) 小林茂美「玉鬘——物語展開の原動質から——」(『山岸徳平・岡一男監修『源氏物語講座 第四巻』所収、有精堂、昭和四六)。
- (11) 関根賢司氏も、『伊勢物語論』(おうふう、平成一七)の中で『伊勢物語』第一二段と『古事記』中巻の倭建命の「東征譚」を重ね合わせて読んでいるが、貴種流離譚については特に言及されていない。
- (12) (11)に同じ。
- (13) 拙稿「夏目漱石『坊っちゃん』試論——反貴種流離譚の構造をめぐって——」(『仙台電波工業高等学校研究紀要』第二七号、平成九・一二)。
- (14) 河添房江「鄙に下る」(『7』に同じ)。
- (15) (13)に同じ。
- (16) 長谷川政春『〈境界〉からの発想』(新典社、平成元)、三一～三二頁。

(平成十七年八月十一日原稿受理)